

平成 23 年 4 月 4 日

東日本大震災・薬剤師ボランティア活動報告

市立秋田総合病院 薬剤部
南雲 徳昭 藤原 洋之

派遣期間：平成 23 年 3 月 27 日（日）～4 月 2 日（土）

派遣場所：岩手県立大船渡病院（岩手県医療局より派遣場所の指定）

主な業務：調剤業務全般

移動手段：自家用車

ルート：秋田中央 IC →（秋田自動車道）→ 北上 JCT（東北自動車道）→
水沢 IC → 国道 397 号（奥州市江刺）→ 世田米（盛街道）→ 国道 107
号 → 住田町（盛街道）→ 国道 45 号（大船渡市）→ 県立大船渡病院
(所要時間：片道約 3 時間 30 分、移動距離：片道約 210km)

県立大船渡病院は、大船渡市および陸前高田市を網羅する基幹病院である。震災前は 80% 院外処方であったが、現在その処方を院内で調剤しているため、スタッフの疲弊が一番気遣われる。スタッフの中には避難所から通勤している方、震災以来未だ自宅に帰らず病院に泊まり込んで仕事をしている方もいた。その負担を少しでも緩和させてほしいとの要望に微力ながら答えることが我々の支援活動となった。調剤内規はホームページからダウンロードし事前に読んでいったが、既に内規が改訂されていた。しかし、調剤支援システムが当院と同じユヤマであり、ほとんど違和感なく調剤に従事できたと思う。

現在、大船渡病院以外の医療機関に通っていた患者さんを対象に、他院コーナーを設置し、お薬手帳等を基に手書きで院外処方せんを発行している。病院の向かいにあるコスマス薬局、AIN 薬局、気仙薬局の三店舗は健在で、院外処方を応需している。その他は、対岸に位置する薬局三店舗のみで、港近郊の繁華街にあった病院・薬局は全壊状態である。また、病院近くにある文化施設「リアスホール」には避難者が 300 名おり、施設内に仮設診療所が設けられ、医療救護班が常駐していた。トイレも地元の中学生により、定期的に清掃が行われ衛生面でも支援がされていたが、通路や大広間に何家族も雑魚寝状態で暮らしており、プライバシーを確保するのは難しい状態であった。

震災当初より、医薬品等は大船渡病院に集約して供給されていて、仕分ける余裕はなく、不足した薬品を探す作業のみとなっていたようだ。電気・水道等のライフラインは復旧し、震災 3 日後にはオーダリングシステムが稼働し、採用薬以外の薬品は使用不可となっていた。岩手の県立病院は比較的後発医薬品の採用率

が高く、供給された医薬品を何でも使える状況ではなく、医療安全の観点からも外部からの医薬品の持ち込みについてはご遠慮願うとの事であった。また、我々と同時期に外部から派遣された薬剤師は岡山大 2 名、県立中央病院 1 名であった。

秋田県薬剤師会からお薬手帳を 5,000 部譲り受け持参したが、院内では調剤・注射薬派出・抗がん剤ミキシング・持参薬の鑑別等で精一杯で、服薬指導やお薬手帳に記載する余裕はないとのことであった。しかし、気仙薬剤師会の方が毎朝巡回され、情報交換をしており、その方にお薬手帳を不足している保険調剤薬局や避難所に配付していただけようお願いしてきた。

固定電話は不通、インターネットアクセスも不能で、未だ仮設の衛星電話を使用している状況であるが、携帯電話は docomo、au、softbank は使用可能である。また、ガソリンの調達は数日前より一般車両でも問題なく給油可能であり、食料・物資についても地元の大きなスーパーでは豊富に商品を陳列していた。帰りは国道 45 号線を南下し、高田を経由したが海岸沿いの町は跡形もなくなり、荒野と化していた。高田から 45 号線は途切れ、高田バイパスから国道 343 号線に向かっては、川沿いに津波が襲い数キロ先まで瓦礫の山並みが続いていた。この光景を目の当たりにし、津波の驚異と人間の無力さを痛感する。高田の町が復興するのに 20 年以上かかるとも言われているが、今ここにいる人たちに最大限の支援と希望を与えてほしいと切に願う。

田村薬剤科長はじめスタッフの方々にはお疲れの中、大変良くしていただいたことに深く感謝申し上げます。なお、昨年度で定年退職となった田村先生は、引き続きボランティアで他院コーナーを手伝われるとのことで、頭が下がる思いである。医薬品の供給については、製薬工場の損壊等により未だ不安定であり、処方については 14 日処方としているが、4 月 4 日からは一般診療を開始し、無菌製剤の混注も開始することである。薬剤管理指導業務等は当面困難とのことはあるが、徐々に院外処方発行を拡大し、以前の体制に戻れるよう奮闘されている。これらは長期的な取り組みでありスタッフの疲労も伺える。日々状況が変わっていく中、当院から 4 月中引き続き薬剤師を派遣することが決まっており、大船渡病院薬剤科スタッフの疲労、心労の緩和に少しでもお役に立てればと考えている。